

「支那に於ける半獸半人神崇拜の起源」の掲載に關して。

本論文は昨年六月郷里長野に長逝せられた市川勇君の遺稿である。十月、墓参に長野を訪れた際に未亡人より同君の遺言なりとして一篇の原稿を渡された。一篇は本誌掲載のものであり、他の一篇は支那古代の狩獵に就て論じられたもの（二百字詰原稿）であるが題名も附けられてゐない、兩篇とも未定稿である。市川君は長野中學卒業後、立教大學豫科を経て、同文學部史學科に進まれ昭和四年卒業せられた。卒業論文は白鳥清教授に提出せられた「支那早婚の風習に關する研究」である。卒業後、豫科に東洋史を講じられる傍、史苑の編輯に當られたが幾ばくもなく病を得て郷里に歸られたが、療養中も研究は廢されなかつた。前史學科長小林秀雄先生の還曆記念史學論叢の刊行に際しては、多分あの健康ではとの豫期を裏切つて早速祝賀の論文を寄せられた、「穆天子西征傳説の性質に就て」がそれである。恩師を懷ふの情と、病中の研鑽には心を打たれた。本論文の發表の是非は頗る悩んだ點である、未定稿掲載の故人の

大郎君の列に會した自分は、更に市川勇君の遺稿を校正することになつた、憂愁寂寞の感は堪へ難いものがある。

本論文には一字一句の改竄も行はれてゐないことを申し上げておきたい。また本文が遺稿掲載の経緯を述べるためでありながら私的に流れたことは寛恕を得たい。

昭和十八年五月 手 塚 隆 義